

# 2025年度 霞が関政策提言ツアー 実施報告書

実施日:2025年2月13日(金)

意見交換:財務省(主計局)、国土交通省、中小企業庁

参加者:赤井ゼミ学生21名、引率教員1名(赤井<sup>1</sup>)



---

<sup>1</sup> 連絡先: 赤井伸郎 (大阪大学国際公共政策研究科教授) [akai@osipp.osaka-u.ac.jp](mailto:akai@osipp.osaka-u.ac.jp)

## 目次

1. 政策提言ツアー企画の経緯 .....	2
2. スケジュール .....	3
3. 記念写真 .....	4
4. 学生感想・コメント .....	6
4.1 財務省でのプレゼン .....	6
4.2 国土交通省 総合政策局 地域交通課でのプレゼン .....	11
4.3 国土交通省 港湾局 海洋・環境課でのプレゼン .....	14
4.3 経済産業省 中小企業庁 事業環境部 財務課でのプレゼン .....	17
4.4 今回の政策提言ツアー全体への感想および、実際の政策決定を行う担当者との意見交換の場(中央省庁、地方自治体、その他)やそのあり方についての意見・希望 .....	20
5. 政策提言ツアー実施の効果:企画者のコメント .....	22

### 1. 政策提言ツアー企画の経緯

大阪大学法学部国際公共政策学科赤井ゼミ所属の学生が2025年度に執筆した論文において提言した政策に関して、実際に、その政策を所管する省庁に訪問し、提言を行うこととした。受賞した論文およびその他の班の論文は、国土交通省の政策にかかわるものであり、その政策担当者と議論する機会を持つことにした。本ツアーに御協力いただいた多くの皆様には、学生に貴重な体験の機会を与えていただいたことに、深く感謝したい。

## 2. スケジュール

### 午前パート

<訪問先>

財務省

<場所>

会議場所:中央合同庁舎4号館 4階 共用第2特別会議室

<タイムスケジュール>

<時間配分:挨拶 2 分+発表 15 分+質疑 13 分>

10:00-10:35 一實班「持続可能なブルーカーボン事業の実現に向けて」

10:35-11:10 藤原班「持続可能な地域交通に向けて」

11:00-12:10 三好班「中小企業の事業承継支援の方向性」

<対応者様>

一實班:財務省主計局 国土交通 6 係 渡部主査

藤原班: 国土交通 2・3 係 高村主査

三好班: 経済産業 3 係 寒川主査

### 午後パート

① 13:30-14:30 藤原班「持続可能な地域交通に向けて」

<訪問先>

国土交通省 総合政策局 地域交通課

<会議場所>

国土交通省 合同庁舎 2 号館 1 階 共用会議室 1

② 14:40-15:40 一實班「持続可能なブルーカーボン事業の実現に向けて」

<訪問先>

国土交通省 港湾局 海洋・環境課

<会議場所>

国土交通省 合同庁舎 2 号館 1 階 共用会議室 1

③ 16:00-17:00 三好班「中小企業の事業承継支援の方向性」

<訪問先>

経済産業省 中小企業庁 事業環境部 財務課

<会議場所>

中小企業庁 会議室

### 3. 記念写真

#### 財務省訪問〔午前〕と意見交換



各省庁との意見交換会(午後)

国土交通省 総合政策局 地域交通課



国土交通省 港湾局 海洋・環境課



経済産業省 中小企業庁 事業環境部 財務課



## 4. 学生感想・コメント

### 4.1 財務省でのプレゼン

財務省への政策提言での発表・議論（自分の班および、他の班）から感じたこと・学んだこと、財務省のハードの印象・財務省のソフトの印象（担当者）など



1. 最も驚いたのは財務省の方々の我々の発表に対する姿勢についてである。激務といわれる官僚の方々が、事前に発表資料を読み込み、質問や指摘を準備してくださっていたのには非常に感銘を受けた。忙しいからこそタイムマネジメントや準備に余念がないのかもしれないと学びになった。また、ハードの印象として質素な印象を強く受けた。財務省にあった車もプリウスであり、机などの設備もそれほど新しいものではなかったため、財務を扱う省庁ならではの印象があったように思う。
2. 財務省のハードの印象としては、とにかく質素であると感じた。新しく綺麗な設備にすると批判を浴びてしまうのだろうか、ということは容易に想像がしたが、今後人材を集める際に、民間企業との競争を考えると設備面で劣る部分が大きくなってしまわないかと思った。また、廊下の至る所にコピー用紙の箱が置いてあって、実際の業務ではどの程度紙を使っているのかはわからないが、まだ電子化されていない部分も多くあるのだろうかと感じた。また、財務省での発表は他省庁と比較してやはり慎重な反応を受けた印象があった。予算に関し

- て大きな責任を持つ省であるということを実感することができた。財務省と政府の関係について、個人の立場や官僚としての立場、責任など板挟みになることも多いのだろうと感じた。
3. 世間の中には財務省はお金の支出を渋っているという意見も聞かれるが、社会保障費の増大などにより国の財政状況の厳しさがますます中で、国の財政の舵取りをしっかりとしなければならぬ財務省の状況を踏まえると、致し方無いことであるように思われた。また、財務省の担当者の方は様々なお話を様々な視点をもってくださり、大いに勉強になったと感じたほか、思っていたよりも堅苦しさを感ずることなくお話を聞くことができた。
  4. ご意見から、政策を考えるうえで「なぜ必要なのか」という視点を持つこと、そして対象と目的を明確化し、それに基づき施策の流れや評価指標を設定することの重要性を強く感じた。短期的な評価指標を設定すれば、定期的な効果検証が可能となり、施策の改善や修正にも柔軟に対応できる。一方で、長期的に期待される効果については、評価可能な指標を設定しづらい点に課題が残ると感じ、この点について実務ではどのように対応されているのか関心を持った。また特に印象に残ったのは、都市交通班の発表に対するご意見である。「計画策定が効率化に寄与する」という結果が得られた際に、直ちに「計画未策定の自治体では改善が必要である」と結論づけるのではなく、「そもそもその効率化は本当に必要なのか」「計画が策定されていないのは、その必要性が低いからではないか」といった背後にある要因や文脈に踏み込んで考える必要性が示された。このご指摘から、データや結果のみから結論を導くのではなく、現場の実情や当事者の視点を丁寧に把握することの大切さを改めて認識した。
  5. 政策は理想だけでなく、実行可能性や持続可能性を十分に考える必要があると学びました。
  6. "今回の提言ツアーは2回目の参加でしたが、去年とは違い、今回は自分たちが執筆した論文をもとに発表する立場だったため、より緊張を感じました。去年は分析方法への質問が多かったが、今年は「その政策が本当に実現可能か」という点に多くの質問が向けられていたことが印象的でした。特に、「なぜリスクのある政策に財源を投入するのか」という問いは重く、公共資金を扱う立場の厳しさを感じました。議論を通して、政策には理想や意義だけでなく、リスク評価や費用対効果の説明責任が求められるのだと学びました。一方で、担当者の方の反応は率直で、時に厳しく感じる場面もありました。しかし、そのやり取りを通して、現実の政策現場では理想だけでは通用しないことを改めて学びました。"
  7. "研究が「学術的議論」から「実際の政策判断の土俵」に乗る瞬間を体感しました。特に印象的だったのは、担当者の方から「財政制約の中で優先順位をどうつけるのか」という問いを受けたことでした。私はこれまで実証分析を通じて政策の有効性を示すことに注力してきましたが、実際の政策現場では、効果だけでなく実行可能性や予算配分との整合性が不可欠であることを再度学ぶ機会となりました。また、他班の発表を通じて、同じ社会課題でもアプローチや価値判断が大きく異なることを実感し、多角的な視点の重要性を改めて認識しました。財務省の建物は重厚で緊張感があり、国家財政を担う組織としての責任の重みを感じさせられた一方で、担当者の方々は非常に真摯で、学生の提言にも真正面から向き合い、論理の

甘さや前提の弱さを具体的に指摘して下さった。その姿勢から、政策とは対話と検証の積み重ねであるとも学びました。"

8. 財務省では、各省庁と少し視点が違い、よりマクロな観点で政策を捉えられていると感じました。政策導入の意義といったマクロな部分と、実際に導入するにあたっての障壁や政策の詳細といったミクロな部分は、自分たちの論の中で相反する場面があったように、財務省と各省庁で方向性を揃えて、政策を導入していく難しさを感じました。また、提言をさせて頂くにあたり、担当者の方は、発表を聞いてくださった方も講義をしてくださった方も、総じて学生に視点をそろえてお話しして下さったことがとても印象的でした。
9. 昨年に引き続き財務省の担当者の前で発表させていただいたが、今回は自らが考え、執筆した内容ということもあり、発表を聞いて下さる担当者がより一層怖く見えた。頂いたフィードバックなどを通して、財務省の各省庁への態度は、どれだけその政策に費用対効果があるのか、国民から徴収する税金ですべき政策なのかを重要視していたように感じた。
10. 私たちの発表に対して、私たち以上の熱量を持って臨んでいただいたと感じました。提言に対する質問だけでなく、実際の業務に当てはめた場合にどのような問題点が考えられるかなどの背景情報も共有していただきました。研究を進める中で感じた国土交通の現状や、それにかかわる役所と役人の方についての印象がおおむね財務省の方の見解と一致していることがわかり、自分たちの研究に自信を持つことが出来ました。財務省を訪問するのは2回目でしたが、学校の校舎みたいだなという印象は変わりませんでした。
11. "財務省への政策提言の発表・議論を通じて、政策を「理想」ではなく「財源制約と制度設計」の中で具体化する視点の重要性を強く学んだ。私たちの班はブルーカーボンをテーマに、環境価値の定量化や財政的インセンティブ設計を提案したが、効果測定の妥当性や既存制度との整合性について鋭い質問を受け、エビデンスの精度と実行可能性をさらに高める必要性を実感した。他班の地方交通維持や後継者不足解消の提案でも、理念だけでなく費用対効果や持続可能な財源確保が議論の中心となっており、財政当局ならではの視点を学ぶ機会となった。財務省のハード面は、無駄のない空間設計が印象的で、組織としての規律や緊張感を象徴しているように感じた。一方でソフト面、特に担当者の方々は非常に論理的でありながらも丁寧に耳を傾けてくださり、単なる批評ではなく政策をより良くするための建設的な対話を重視している姿勢が印象に残った。理論と現実を接続する場として、貴重な学びの機会であった。"
12. 頂いた意見はいずれも合理的でありつつ、その時の政治の状況やステークホルダーの意識などを考慮していて、これが財政を守る人たちの考え方なんだととても勉強になった。私たちの班の地方交通の話では、赤裸々な話や交通計画の歴史の話聞くことができ興味深かった。地方交通計画の作成は、計画策定自体に意味があるのではなく、その過程を通じて問題を共有できるようなコミュニティが形成されることが主眼ではないかという意見は、私たちは考えもしたことがなかった。ブルーカーボンの議論において、脱酸素に加えて経済発展に資するか否かという評価軸も重要であると聞いた時に、環境政策の難しさを痛感した。空気

が綺麗になったり気温の上昇が抑制されたことによって上がる国民の効用は短期的には小さいと考えると、経済に貢献するという指標が政策を進めるにあたり大事であることはとても理解できる。しかし、経済発展を起こしつつ環境を保全するということの難しさは想像を超えているのだろうなとも思った。

13. 主計局調査課長・浅賀様の、税の増収に関するお話が最も印象に残っている。衆議院選以前より SNS で政治や政策に関する投稿を多く目にする中で、増収なら国民に分配、などといった投稿も見かけた。その投稿内容は税収が浪費されているといったものであり、地方交付税交付金や物価上昇については触れられていなかった。私もその内訳については知らなかったので、国の正しい情報の発信方法も問われていると考える一方、私たち国民の情報収集能力やリテラシー自体も問われていると感じた。
14. 財務省の方々との議論を通じ、ブルーカーボンを単なる環境保護政策ではなく、国の経済や資源を守る政策として考える必要性を強く感じた。特に、脱炭素そのものが目的ではなく、それによってエネルギー自給率の向上や地域の活性化を同時に進めることが重要だという視点が興味深かった。提言を行うに際も、二酸化炭素を減らす数字だけでなく、漁業の振興や水質の改善が、具体的に誰にどのような利益をもたらすのかを明確にするべきだと痛感した。また、費用対効果の面に関しても、外部のコンサルタントに任せきりにせず、地元の人や知見のある人が主体となって取り組む体制を作ることも重要であると学んだ。

(補足) 財務省食堂のランチについて。(阪大のいろいろな学食と比べて)。財務省職員の職場環境について感じたことも。

1. 食堂のランチでは、メニュー、価格ともに大学の学食と大きく違いはないと感じた。職場環境についても特別感じることはなかったが、自販機がないことに驚いた。飲食は禁止されていなかったため、自動販売機を設置することができない理由があるのだろうと思い、興味深い。
2. 決済手段が現金のみであったので、この部分でも財務省のハード面の質素さがあらわれていたように感じた。また、自分が財務省を出る時間が 18 時ごろだったのだが、意外と同じ時間に退勤している人もいたので、ポジションによるのかもしれないが、定時で帰宅できる人もいるのだなと思った。
3. 今回はラーメンを食べたが、味としては美味しかった。具が多めに入っていて満腹感を感じやすかったように感じた。阪大の食事との比較に関しては、最近長らく阪大のラーメンを食べた記憶がないためわからない。財務省の雰囲気は思ったよりレトロで重厚感があるように感じた。
4. 阪大の食堂と変わらない和やかな雰囲気、落ち着いて食事を摂ることができた。通常の定食や麺類のほか海鮮系もあり、メニューの豊富さに驚いた。財務省キャリアについては、「財政」という切り口から各省庁の政策に関われる点に面白さを感じた。職場環境について、館

内の設備は無駄なく機能的で、職務に必要な機材が過不足なく整備されているような印象を受けた。

5. 薄暗い場所なのが残念でしたが、提供スピードが早かったです。
6. 去年に続き、改めて美味しいと感じました。価格もリーズナブルでありがたかったです。議論の時間が短くなってしまい、急いで食べることになったことや、量も思ったより多かったことが印象に残っています。来年参加するなら、セットではなく単品にしようと思います。
7. 特にこれといった特徴や印象は受けなかったため特筆することはありません。
8. 定食をいただきましたが、量・価格ともに良心的で、大阪大学の学食と比較しても、むしろ阪大より学生に優しいのではないかと感じました。一般に、大手企業の社員食堂には「新しく綺麗で、豪華」というイメージを抱いていますが、財務省の食堂は、そうした華やかさよりも実用性を重視した、やや質素な印象を受けました。コストへの意識や国民への配慮が反映された食堂であるように感じられました。
9. 財務省食堂のランチは、メニューを見ると栄養バランスが偏っていないのか心配になるようなメニュー構成で、彩などがそろっているとは言い難いものだった。国民からの目もあるかと思うが、国家公務員の食事としては、寂しいものだったので、もう少し拡充しても良いと感じた。
10. ラーメン店で 2 年以上勤務している身として、財務省食堂のラーメンがどれほどかを調査しました。お値段は替え玉付きで約 700 円と非常に安いです。味もとてもよかったです。もし提供に時間をかけられるなら、麺線を整える（麺の向きをきれいに揃えて盛り付ける）とトッピングが沈まなくて見栄えも良くなるのかもしれない。
11. "財務省での政策提言に加え、食堂や職場環境も強く印象に残った。阪大のさまざまな学食と比べると、メニューの多様性や賑やかさでは大学の方が上回る部分もあるが、落ち着いた雰囲気の中で静かに食事ができる点は財務省ならではのと感じた。私はマグロ丼を食べたが、見た目はシンプルながら味は非常に美味しく、素材の良さが感じられた。また、財務省キャリアの方々は、議論において非常に論理的で思考のスピードが速く、数字や制度の細部まで踏み込んで考えている姿勢が印象的だった。一方で、学生の提案にも真摯に耳を傾け、建設的な質問や助言をくださる柔軟さも感じた。職場全体としては静かで引き締まった空気があり、緊張感の中にも淡々と業務に向き合うプロフェッショナルな環境であると感じた。"
12. 大学の学食のように種類が多いわけではないが、定食やうどん、その他追加で買えるいなり寿司などもあり、美味しかった。毎年定食の量が多くて、うどんしか頼めないのが少し悲しい。役職が上の人から新人の人まで幅広く同じ食堂でご飯を食べていると言うのはコミュニケーションの機会も広がりそうでいいなと思った。
13. 3 回目にしてようやく適切な食事を選ぶことができた。全体的に栄養バランスの取れた食事だとは思いますが、それ以上に量が多く食べきれない学生も多かった。それほどのエネルギーを取らないとこなせない量の仕事をしているのかと考えた。
14. おいしかったです。

## 4.2 国土交通省 総合政策局 地域交通課でのプレゼン

国土交通省 総合政策局 地域交通課への政策提言ツアーでの発表・議論から感じたこと・学んだこと：(「自分で発表してみてもよび」「他班の発表を聞いて」の視点で)



1. 他班の発表を聞いて、担当者の方でも論文の趣旨と同じように、交通計画の策定が事業運営の効率化には必ずしも結びついていない可能性を認識していらっやったことに驚いた。理論やデータに基づく推測が現場の体感と一致しているのは、分析の成果として素晴らしいと思う一方で、研究としてのインパクトや新規の視点の創出には至っていないのかもしれないと考えた。
2. 地域交通について、本質的な解決策の一つは自動運転なのではないか、という点に関して私もそうかもしれないなと思った。その一方で、自動運転技術の導入は費用がかさむため、それよりも低コストで実施できる政策としての交通計画の策定を提言したのではないかと思う部分もあり、堂々巡りになってしまうのではないかとも思った。
3. WEST や ISFJ の時は最初の現状分析などのパートを発表した一方で、今回は発表を行わず、議事録作成などの裏方作業に徹した。基本的には今年度は班の発表の中心的部分には関わらなかった一方で、分析や政策提言などにおけるその過程にはかなりの苦勞を要していた印象があったため、圏域に関する政策提言が国の政策的方向性に近いものであるということがわかった際、どことない安心感を感じた一面があった。

4. 圏域ごとの計画策定の提言へのご意見で、関係者の増加によって都道府県の負担が増加するという指摘に納得し、地域連携の難しさを感じた。一方で、各自治体が現状を把握することや一つの方針を定めて地域全体として動くことの意義についても言及されていた。こうした政策実行を通じて生じる副次的な効果に注目することもできるという点は、自身にとって新しい視点であり、非常に勉強になった。
5. 担当者の方からいただいたご意見は、単なる否定ではなく、現場の実情を踏まえた現実的な視点に基づくものであり、政策は理想と現実のバランスの中で磨かれていくのだと学びました。また、国の立場からは、個別自治体の事情だけでなく、全国的な公平性や制度全体の整合性も考慮しなければならないことを理解することができました。
6. 他の班は同じ国土交通省に提言していましたが、扱っている分野は私たちとは異なっていたため、担当者の方からの質問やコメントの内容も大きく違い、それぞれの分野で重視される論点が異なることを実感しました。同じ省庁であっても、分野によって課題意識や政策の評価基準が変わることを学ぶ良い機会になりました。
7. 同じ地域交通の課題でも、住民視点や事業者視点など多様な切り口があることが改めて印象的でした。自分たちとは異なるアプローチを知ることで、課題を多角的に捉える重要性も学びました。また、具体的な数値や事例を交えた発表はやはり説得力が高いと感じ、自分の発表を振り返るきっかけにもなりました。
8. 実際に政策を検討し、導入される側の視点に立った時に、その政策の意義も大前提重要である一方で、費用対効果であったり、ステップを踏んで導入することができるような、実現可能性の観点も非常に重要であることに改めて気付かされました。論文では、政策を立案するということに時間を割いてしまい、どうしても実現可能性の観点の検討が疎かになってしまいがちなので、立案の段階から並行して考える必要があると感じました。
9. 発表班と国土交通省の担当の方の活発な議論が行われ良かった。発表班の中にも欠席してしまった人がいたものの、分析パートについては、それを班全般でカバーしており、分析でも担当者との間で、議論が交わされており、良かった。
10. 対応していただいた職員だけでなく、当日都合がつかなかった方からも多くのコメントをいただくことが出来ました。公共交通計画の策定を進めるにあたって、現時点で策定していない自治体への働きかけ方についての理解が深まりました。策定の必要がない、または策定に充てる人員と金銭が用意できない自治体が存在することは研究から明らかになりましたが、その状況で、策定を努力義務にすることがそれらの自治体が策定に動くインセンティブになるのかは疑問でした。職員の方には実務的な視点を交えて質問に答えていただき、知識が深まりました。
11. 議論の中では、国の支援のあり方や自治体との役割分担、データに基づく需要予測の重要性などが指摘され、理想論だけではなく制度設計や財源、実務運用まで踏み込んで考える必要性を学んだ。また、交通を「移動手段」としてだけでなく、地域コミュニティを支える社会

基盤として捉える視点が印象的だった。政策提言には、地域の実情を丁寧に把握し、複数の主体を巻き込む現実的な道筋を示すことが不可欠であると強く感じた。

12. 国土交通省の方の意見を聞いて、改めて地域交通の持続性という課題の難しさを感じた。財務省の方の話を聞いた直ぐ後に、国土交通省の方のお話を聞いたこともあり、国土交通省さんは地域の個々の事例からミクロな視点で日々政策を考えておられるということをととも感じました。私たちの提案した圏域単位での計画策定について、関係者が増えるというメリットがある一方で、県の担当者の負担が増加するというデメリットがあると教えていただいた時にそれを感じました。公的機関では担当者が変わることに加え、政治の事情などにより交通部門においても常に地域交通の持続性が最優先されるわけではないということを学びました。
13. フィーダー系統補助金について、良い意味でいえば地域の実情に合わせて分配する補助金ともいえるが、ゾンビ系統を延命させてしまうような意味合いも持つ。それに対し、5年に一回の見直しを設けることでふるい分けを行うが、その導入だけでも多大な労力を費やしたことを知った。国土交通省の白書や資料からだけでは得ることのできない現場の話を聞いた貴重な時間だった。
14. 国土交通省総合政策局地域交通課の方々のお話を聞いて、特に、国による一律の政策では効率化に限界があり、自治体がバス会社等の関係者と調整を行うプロセスそのものにも価値があるという指摘が印象に残った。また、広域化に伴う調整コストの増大や、自治体の財政状況・熱量によって交通網の格差が生まれてしまう現場の方々からの指摘は昨年自分が論文を書いていた際には考慮できていなかった部分だったため、大変勉強になった。

#### 4.3 国土交通省 港湾局 海洋・環境課でのプレゼン

国土交通省 港湾局 海洋・環境課への政策提言ツアーでの発表・議論から感じたこと・学んだこと：(「自分で発表してみて」または「他班の発表を聞いて」の視点で)



1. GX 政策における考え方として、単に脱炭素化することのみに目的があるわけではなく、資源安全保障が主題であるのではないかという主張は、目から鱗であり、自身の既存のエネルギー観を大きく変えるものであった。二酸化炭素量などの指標だけに着目するだけでは足りないのだと知った。
2. 自分の班の提言した政策に加えて、ブルーカーボンそのものの知名度向上が必要とおっしゃっていて、自分もそう思っていたし、その上で知名度向上に効果的な施策はなんなのだろうか、と改めて感じた。私の場合は、高校の生物の授業で先生がブルーカーボンの紹介をしたことがあり、そのおかげでこの研究に取り組む前からブルーカーボンの存在自体は知っていた。教育的な観点から知名度を上げていくのも有効かもしれないと思う一方で、まだ投資をするような年齢ではないことから即効性には欠けており、投資を行うような層に対して知名度を上げていくのは難しいと感じた。また、発表で自分が担当していた箇所である先行研究をされたご本人の前で発表をしてフィードバックを頂けたのはとても貴重な経験だった。
3. ブルーカーボンの班の発表に関しては、基本的には他の班としてこれまで発表を聞くのみに徹しており、今回もその立場は変わらなかった。ブルーカーボンという事業としての経験がいまだ浅い分野における政治的方向性について様々なお話を聞いて良かった。
4. マッチング制度の提言に対するコメントで、そうした環境の整備だけではならず、その利用者が制度の存在を知っていなければならないとおっしゃっていたのが特に印象に残った。たとえ

画期的なアイデアがあったとしても、政策として実行に移すにはその前後の支えが必要で、パッケージとして考える必要があるのだと気づかされた。

5. 環境価値を政策として制度化するには、科学的根拠やデータの信頼性が不可欠であることを学びました。また、ブルーカーボンは環境保全だけでなく、地域の漁業振興や企業のカーボンオフセット需要とも結びつく可能性がある一方で、費用対効果や制度設計の難しさもあると理解しました。
6. "今回の国土交通省への政策提言ツアーでは、自分たちの提言を直接発表し、議論できたことが非常に貴重な経験となりました。実際にヒアリングをさせていただいた先端分野の専門家である方も来てくださり、とても驚きましたし、より一層緊張しました。これまで調査や議論を重ねてまとめてきた内容を、当事者の前で説明することの重みを強く感じました。全体的に前向きな感想を多くいただき、長い間取り組んできた努力が認められたように感じてとても嬉しかったです。また、自分たちと同じような問題意識や考えを共有してくださる場面もあり、共感していただけたことが印象に残りました。"
7. ブルーカーボンを地域活性化や民間参入と結びつける多様な視点があることが印象でした。同じ環境課題でも、制度面やインセンティブ設計に着目することで提言の方向性が大きく変わることが特に印象的でした。多角的な視点というものの重要性を改めて実感することができました。
8. まずは、この1年間 J ブルークレジットの発表を聞いていた中で、本テーマにおける担当者様の存在が非常に大きいものであると感じる場面が多くあったので、今回実際にお会いすることができてとても光栄でした。環境への取り組みというよりは、地域への貢献、地方創生の側面が強いといった視点は、今まであまり考えきれていなかった部分だったので、大変興味深く、勉強になりました。
9. 実際に自分たちが執筆した政策分野の専門家お二人に自分たちの研究内容を発表するということは、緊張するものの、光栄な経験でもあり、貴重な経験を与えていただけて良かった。ブルーカーボンの知名度不足、認知度が乏しいという点については、お二方と話していても、課題とされているようであったので、そちらにアプローチしたような研究内容にしても良かったと今更ながら感じてしまった。今回の論文執筆を通して、ブルーカーボンに対し興味・知識を持つことができたので、自らも少しでも、広められるような行動をとりたい。
10. ヒアリング先の方に発表を聞いていただけるという環境はうらやましかったです。発表者についてですが、マスクを着けたままであったために、マイクのない環境では遠い席の人に聞こえづらかったのではないかと感じました。
11. "議論を通じて最も強く感じたのは、環境政策であっても理念や将来像だけでなく、制度設計・予算措置・現場実装まで見据えた具体性が不可欠であるという点である。ブルーカーボンの吸収量算定方法やクレジット化の信頼性、港湾管理者との役割分担など、実務に即した質問を多くいただき、政策として社会実装する難しさと同時に可能性も実感した。特に印象的だったのは、港湾という空間が物流拠点であると同時に、環境価値を創出するポテンシャル

ルを持つ場として捉えられていたことである。藻場・干潟の再生をどのように港湾政策に組み込み、地域経済や脱炭素戦略と接続させるかという視点は、自分たちの提案をより立体的にする示唆を与えてくれた。今回の議論を通じて、環境価値を定量化し、財政的・制度的枠組みの中で持続可能な仕組みに落とし込む重要性を改めて学んだ。”

12. 以前、班がヒアリング調査をさせていただいていた方に直接ご意見を頂くことができたということもあり、より深い話を聞いた。特に地域でのブルーカーボンの取り組みは、自治体主導ではなく、地域の漁業組合が中心となって地方自治体を活動に引き入れるケースが多いという話が興味深かった。政策の対象を市町村など安易に決めるのではなく、誰にとって1番利益があるのかということ进行深入考える必要があると感じたお話だった。
13. ここでは特に建設的な意見を頂けたように考える。特に脱炭素だけでいいのかという点と、誰に向けてと問われた点についてそう感じた。複雑な課題であったからこそ多方面に考える必要があったという面はあるが、その中でももう少し立場を明確化させてもよかったのではと考えさせられた。
14. ブルークレジットが比較的高単価で取引されている背景には、単なる炭素吸収量への対価ではなく、藻場再生に励む「人」や「地域」を応援したいという心理的・情緒的なコベネフィットが強く影響しているというお話や、認知度の低さが最大のネックであるというようなお話は論文を書いていく中で班内でも認識していた問題であったため、現場の方々も同じような認識を持たれているということを確認できたことは大きな意味があったと感じる。ただ、想定以上に地域を応援するということがブルークレジットの原動力になっていると感じ、地域活性化とクレジット売り上げについての分析が可能であればより面白い提言も可能になってくるかもしれないと感じた。

### 4.3 経済産業省 中小企業庁 事業環境部 財務課でのプレゼン

経済産業省 中小企業庁 事業環境部 財務課への政策提言ツアーでの発表・議論から感じたこと・学んだこと：(「自分で発表してみても」または「他班の発表を聞いて」の視点で)

1. 中小企業保護と企業の新陳代謝の折り合いをどう考えていくかという質問に対して、省庁としての指針を示してくださった一方で、実務者として折り合いをどう考えるのかについて苦心しているというお考えを仰っていて驚いた。実務者でも難しい問題であり、政策提言を考えるうえでは、微妙な調整には踏み込まず、「市場原理に任せる」など、あくまで理論的なスタンスに立脚すべきなのかもしれないと考えた。
2. 事業承継のティア制度について、ステークホルダーを説得する上でフレーミングが重要になってくるというお話が印象に残った。当事者ではないからかもしれないが、自分自身ではあまり感じたことがなかったものの、たしかにティアを分けることによって上下関係があるように感じてしまう人もいるのかもしれないと思った。政策の規模が大きくなり、関わる人が多くなればなるほど大変なことも増える、というのはこういう部分にもあらわれてくるのかもしれないと考えた。
3. 中小企業に関する発表に関しても基本的にはこれまでと同様に聞くのみに徹する立場であった。ティア制という言葉が実際の現場の人達にどのような受け取り方をされるのかなど、今までに感じることのなかった視点が得られて勉強になった。
4. 発表へのご意見の中で、行政としては支援機関・事業者・承継者などの関連アクター間の横の連携を強化する必要があるとおっしゃっていた点が特に印象に残った。確かに事業承継支援の基盤となる社会資源は豊富にあるように思われ、既存の支援枠組みの改善やつながりの強化がその有効性を最大限に活かす手立てとなりうるという点に納得した。しかし、現状の連携状況においては具体的にどういった部分に問題があり、また各機関の方々の同意を得ながら協力して施策を実行するには現場の感覚を持っていることが必要である。その点について、ここでも改めて現場を知ることの重要性を感じた。
5. 中小企業の支援策については、ソフト面も含めた幅広い対応が求められるというお話が印象的でした。新たな制度を作るにあたっては、既にあるものとの連携や接続の点も考える必要があることも学びました。
6. "中小企業庁への訪問は初めてで、とても新鮮でした。担当者の方が4人も来てくださり、活発に議論をしていただいた姿が印象に残っています。何よりも印象的だったのは、経営者の不安や現場の思いといった「感情面」にも踏み込んだ議論が行われていたことです。政策は合理性や効率性だけでなく、実際にそれを受け取る人の気持ちにも配慮する必要があるのだと感じました。"
7. これまで積み重ねてきた分析や提言内容を政策担当者と直接議論できたことが非常に印象的でした。特に、実現可能性や既存制度との整合性について具体的な意見交換ができ、単

なるアイデアではなく「実装」の観点から議論できたことに大きな学びを感じました。また、提言の前提やデータの整理について前向きな評価をいただき、自分たちの努力が一定程度認められたように感じ、自信にもつながりました。政策提言は理論だけでなく、制度や予算、現場の実情を踏まえて設計することが重要であると改めて実感しました。

8. 中小企業庁のご担当者さまとの意見交換を通じて、特に事業承継の領域においては関係者が多い分、新たな政策の導入や支援の方法が非常に難しいと感じました。話題の中心にもなった経営者の感情の部分が支援をする上での障壁となってくる際に、例えば「第三者に自分の会社を譲りたくない」と思っている経営者に対しては、積極的な支援を講じてもなかなか理解を得ることが難しく、また、意思に反する決定を、わざわざ人員と財源を割いてまで促す必要性があるのかなど、国として事業承継を支援する意義を改めて考えさせられる機会になりました。
9. 学生が経済学を研究して論文を執筆するのであれば不必要と考えられるような、感情の部分について、経済産業省の政策を考える担当者の方たちのお考えを聞いたのは、非常に貴重な経験だった。実務者の方の職務上での葛藤を聞くことができ、官僚の方の人間味のある部分に触れられた。
10. 発表内容に対して、職員の方々がリアクション豊かに聞いておられたのが印象的でした。それほど印象深い発表と質問だったのだと思います。三重県を事業継承の問題を解決したモデルケースとしていることが中小企業庁の方の評価の高さにつながったと感じました。
11. "事業承継は単に「後継者がいない」という問題ではなく、財務基盤、経営者保証、M&A 市場の整備、地域金融機関との連携など、複数の制度と密接に絡み合う構造的課題であることを実感した。議論では、補助金や税制措置だけでなく、経営者の心理的ハードルや情報の非対称性といったソフト面への対応の重要性も指摘され、制度設計には多角的な視点が重要だと学んだ。また印象的だったのは、担当者の方々がいわゆる「官僚らしい」堅さをあまり感じさせなかった点である。もちろん論点整理や制度理解は非常に的確だったが、議論は終始フラットで、現場の実情や中小企業経営者の目線を重視する姿勢が強く感じられた。"
12. 私はサプライチェーンを意識した事業継承の支援の必要性が 1 番興味深かった。取引先が廃業してしまうと連鎖的に色々な会社が潰れてしまうという話だったが、どのような産業においてそれが起こりやすいのか、取引先の中でも材料の入手と生産物の売却先のどちらの方がインパクトが大きいのかなど色々気になったし、自分でも調べてみたいと感じた。また、経済の話なのでもっと合理的な主体を想像していたが、今回の政策提言ツアーの中で中小企業庁が 1 番人間の非合理的な問題を意識して対応しているように感じたのも面白かった。中小企業政策は、政治的側面も強く、合理性だけでは動けないのだと思う。
13. 中小企業庁と他の省庁で圧倒的に違うと感じたのは、良い意味で役人感が少ないところだ。私たち学生が話すのをためらうような壁を感じさせなかった。霞が関や政府関係の役人のみにとどまらず、全国幅広く地方の経営者や社員と関わっている方々でもあり、コミュニケーションの視点が感じられた。論文執筆にあたって中小企業側の意見を聞く機会を設けることが

できなかつたので、今回、実際に多くの現場と関わってきた中小企業庁の方々の意見を聞いたのは本当に良い機会だった。

14. 中小企業庁 財務課・経営支援課の方のお話を聞いて、事業承継における経営者の「感情面」と「制度」の折り合いや、親身さと客観性を併せ持つ「よそ者」視点の人材確保など、数字だけでは測れない支援の考え方を持つ必要があるということを痛感した。

#### 4.4 今回の政策提言ツアー全体への感想および、実際の政策決定を行う担当者との意見交換の場(中央省庁、地方自治体、その他)やそのあり方についての意見・希望

1. 政策における実務を担う省庁の方々からご意見をいただいたことを非常にありがたく思う。今後の希望として、事前に資料を読んできていただけているのならば、発表よりも意見交換の時間を多く設けるのも良いのではと感じた。
2. 今回の官庁訪問まで、官僚の仕事の現場について、あまり具体的なイメージがついていなかったが、今回で部分的ではあるが内情に触れることができた。財務省と他の省庁の二つに対してプレゼンをしたことで、その2つの間の温度感の差を身をもって感じる事ができた。その上で、実際に政策を作っていく過程では、この踏まえた上での調整を行なっているのだろうなということが分かり、部署間の調整だけでもかなりの苦労があるのだろうなと思った。その上でさらに議会、政治家との調整も行なっていると考えると、一つの政策を実施するコストの大きさが少しわかったような気がした。
3. 普段はほとんど見る機会のない省庁の内部を実際に見ることのできる貴重な機会が得られ大変刺激になった。また、省庁の担当者の方のお話は普段は聞くことのできないようなものであり、また、実際の政治担当者ならではの視点も含め、貴重な経験となったように感じた。
4. 今回の政策提言ツアーを通じて、自身の政策への捉え方が大きく変化した。財務省と他省庁の両方の立場からのご意見を伺い、変化の著しい現代社会で人々の生活を維持し他国との競争に追いつくには新しい政策が求められる反面、事業の持続性のため財源についても厳しい目で検討する必要があることが分かった。自分自身、これまではある課題を発見しそれへの解決策を考える方向で検討してきたが、今後は限りある資源をどのようにして効率的に配分するか、民間の力を積極的に取り入れるといった視点からも施策を評価するようになりたい。この度は貴重な機会をいただき、ありがとうございました。
5. 来年は自分たちが頑張ろうと思いました。
6. 今回の政策提言ツアーを通して、机上で考えてきた政策が実際の行政の現場でどのように受け止められるのかを体感することができました。担当者の方々との意見交換は緊張もありましたが、直接フィードバックをいただいたことは非常に貴重な経験でした。政策は理想だけでなく、財源や制度など現実的な制約の中で判断されていることを学びました。今後もこのような対話の機会が継続し、より双方向的で深い議論ができる場になればよいと感じました。
7. "今回の政策提言ツアーを通じて、政策は机上の議論だけでなく、財政制約や制度上の枠組み、現場の実情を踏まえたうえで総合的に判断されていることを実感しました。実際の政策決定を担う担当者の方々との意見交換では、提案の「正しさ」だけでなく、「実現可能性」や「優先順位」の視点が不可欠であることを改めて学びました。また、学生の提言に対しても真摯に向き合い、具体的なフィードバックをいただいたことは大きな刺激となりました。こうした対話の機会は、政策形成のプロセスを理解する上で非常に意義深いものであり、今後も中

央省庁や地方自治体との双方向の議論の場が継続されると良いと感じました。政策は一方の決定ではなく、多様な立場の対話を通じて磨かれていくものであると感じました。"

8. 今回は三年生として、本提言ツアーが自分たちで検討した政策についての意見を伺える機会であるという貴重さや、ありがたさを改めて実感しました。スケジュールがとてもタイトな中で、自分たちの論文の重要な部分をかいつまんで話すことで、より活発な意見交換の場にてきると感じたため、発表者側の視点でまだまだ改善すべき余地があったと感じました。お忙しい中ツアーを調整して下さった赤井先生をはじめ、各省庁のご担当者さまに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。
9. 三回生になって、やっとこのような中央省庁の方との意見を交わすことができる場の貴重さ、有意義さを実感している。ぜひ来年も交流できる機会があると嬉しく存じます。
10. 自分自身も含め、集中力を欠く姿がよくみられました。反省すべきだと感じます。
11. "今回の政策提言ツアー全体を通じて強く感じたのは、政策とは理念や問題意識だけでなく、「制度」「財源」「実務」という具体的な制約条件の中で磨き上げられていくものだという事である。財務省での議論では財源や費用対効果といった厳格な視点の重要性を学び、国土交通省では現場実装や制度との整合性を踏まえた具体化の必要性を実感した。また、中小企業庁では制度論に加えて現場の実情や当事者の心理に寄り添う視点の重要性を学んだ。それぞれの省庁で立場や所管が異なるからこそ、同じ「政策」でも重視される論点が異なることが非常に印象的だった。特に意義深かったのは、実際に政策決定に関わる担当者の方々と直接意見交換ができた点である。中央省庁の担当者は論理的かつ実務的でありながら、学生の提案にも真摯に向き合い、単なる評価ではなく建設的な対話を重ねて下さった。政策形成の現場は決して閉ざされた空間ではなく、多様な主体との対話の中で進化していくものだと感じた。"
12. とても貴重な意見を聞かしていただき、大変学びのある時間になった。やはり、それぞれの分野を管轄する省庁さんと財務省さんの話を同時に聞けることが 1 番学びの多い部分であったと思う。どうしても私たち自身、政策を推進する各省庁側の目線に回ってしまいがちだから、特に財務省の方から厳しい意見をいただけることはとても参考になる。今後の希望としては、各省庁さんへの訪問を先に行っても面白いのではないかと思った。各省庁の方からいただいた意見やアイデアを持ちつつ財務省の方から厳しい意見をいただくと、また違った見え方もできるのではないかと思った。
13. 3 年間参加して毎年感じるのは、それぞれの担当の方がいかに自分の仕事に誇りをもって取り組んでいるかということだ。ジョブローテーションで 2, 3 年に一度は必ず担当が変わるシステムであるにもかかわらず、その道の専門家であるかのような知識教養を身につけていく姿は、自らが社会に出て働くにあたり、目指すべき姿だと考えた。
14. 参加するのは今回で 3 回目だったが、毎回自分たちでは考え付かなかったような指摘や意見、政策の考え方をお聞きすることができ、現場と日々向き合って考えることの重要性を痛感

している。このような貴重な機会の中で学んだことを忘れずに今後の社会人生活に生かしていきたい。

## 5. 政策提言ツアー実施の効果：企画者のコメント

2013年度に政策提言論文の全国大会にゼミ論文をエントリーし、その成果を実際に霞ヶ関での政策担当者に見てもらいコメントをもらうという「政策提言ツアー」を開始して、今年 2025年度で13年目となる。毎年、財務省をはじめ、政策に関わる担当の省庁のみなさまには、大変お忙しいところ、若い学生のチャレンジの応援という形で、お時間を作っていただいている。感謝したい。実際に政策を設計している担当者と意見交換が出来る機会があることは、論文執筆の大きなモチベーションにも、また、今後、社会・政策のあり方を考える上で、貴重な体験となる。この体験をした学生が、社会に出て、社会問題に直面したときに、民間部門であれ公的部門であれ、この経験が役に立つことがあると確信している。それだからこそ、企画者および対応していただいた皆様への恩返しとなるのである。この企画の継続には、時間も苦労も多いが、学生の成長があつてこそ、やりがいがある。継続は力なり。